

---

# 雪はやまない

緋花李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪はやまない

### 【Nコード】

N2852K

### 【作者名】

緋花李

### 【あらすじ】

初雪に町は白色に染められていく。

それはある少年少女の心まで白く、冷たく染めて行くものだった。

『あなたは誰を想っているのですか？』

雪が降るたび動かされる純粋な想いはキミに届くのだろうか

## 曇天 【MIRAI】

「で、ここはいいな。次は」

数学の授業中。

正直言つてめんどくさい。今さら昨日やった授業をしたって何も面白いことなんてなかった。

ななみね みらい  
七峰未来、高校2年。

未来ははとりあえず黒板の板書だけはしていたが、その内容も昨日の授業とほとんど同じ。『復習』なんてめんどくさいことをなぜやるのだろう。授業を受けるなら新しいことを覚えたいのに、同じことをやっていては意味がないと思った。

「……ちよつと未来」

いきなり横から声をかけてきた少女。

この少女は未来の『幼馴染』の水崎愛奈。みずさき あいな

小学校から中学、高校となぜか一緒になつてしまった腐れ縁。そう、未来は思っている。

「んだよ、授業中だぞ。静かにしてろよ」

愛奈の方に顔を向け人差し指をたてて口元に当てた。  
それを見て呆れたようにため息をつく愛奈。長めの茶髪っぽい髪がさらさらと肩を流れる。

「アンタねえ……一体どこに板書してんの？」

「へ？」

愛奈が指差した先に視線を落とすとぼーっとしていたせいか、ノートは真つ白で逆に机には随分と汚い字で数字がびっしりと書かれていた。

「げっ！！やっべ」

思わず叫んでからしまったと口を抑える。教室内からくすくすと笑いが起こった。

「こらー七峰。うるさいぞー」

「は、はい！すみません」

愛奈が隣で肩を落とすのが分かった。未来は慌てて机の上の文字を消しゴムで消していく。

「（くっそ、めんどくせえな……）」

未来は眉をひそめながら静かに文字を消す。

どちらにしろ授業を受ける気は初めからなかったし、新しいことはやらないようなのでどうでもいいと思い、未来は消しゴムのカスを払うと、頬杖を突く。

未来の席は窓側。いつもなら光がさして温かいのだが今日は生憎曇天で太陽の光は一切地上に降り注がなかった。

学校帰り。

愛奈とは家が近いと一緒に帰ることになっている。それを見たクラスメイト達は冷やかしてくるが、別に未来は気にはしていなかった。

学校から家までの距離は1,5kmくらいだ。もちろん徒歩で学校に通っている。未来の家と愛奈の家は100mくらい離れている。道のりで言えばの話だが。

「未来ってさあ、何か夢中になってるものとかってないわけ？」

唐突に話題を変えてきた愛奈に未来は前を向いたまま適当に答えた。

「はあ？うーん。学校に行くことと部活すること？」

「……ふうん。カノジョとかにきょーみないの？」

愛奈の質問に未来は肩をすくめる。そしてにやりと笑うと愛奈の顔を覗き込んだ。

「何？俺のこと好きなのか、愛奈」

「ばーか。違うよ。……ちょっとね」

「あつそ」

意味深なことを言って顔をそらす。愛奈の顔は最近読めなかった。いつもなら何を考えているのかさえ分かるはずの少女の顔は最近、

未来の知らない顔になりつつある。自分の知らないところで彼女が何をしようと勝手なのだが、なぜか気になってしょうがなかった。

いつもなら見えるはずの星も見えない曇天の空の下、未来と愛奈はにぎわう街の中を歩いていた。

**曇天 【MIRAI】（後書き）**

こんにちは！！緋花李です。

恋愛物は初挑戦……友達と書いている漫画でも幼馴染はなかなかいい味出してくれます。

これからよろしく願いいたします！！

## 夜空【AINA】

「じゃあね未来。今日の復習、ちゃんとしなさいよ？」

「りょーかい。愛奈こそ今日塾だろ？気をつけろよ」

「うん、ありがとう」

愛奈は笑顔を向け、小さく手を振る未来に手を振り返し、家の玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「おかえり、お疲れ様」

愛奈の声に反応したのは姉の杏だ。愛奈の家には父はいない。母は今、仕事の都合で京都にいるため、最近は帰ってきていなかった。杏は愛奈と5つはなれた姉だ。もうすでに就職し、家の事をやってくれている。

「あれ、お姉ちゃん今日仕事じゃないの？」

「うーん。仕事片付けちゃったから」

杏はイラストレーターをやっている。家で働ける仕事を探したうえの決断だった。

そんな姉の優しい心遣いに愛奈はとても尊敬していた。父がいない代わりに愛奈が心配しないように、辛くないようにと今まで頑張ってきたくれたのだ。



愛奈にとって杏は尊敬でき、一番信賴している人物であり、大好きな人なのだ。

だが、無理ばかりする杏に愛奈はいつもハラハラしていた。

「お姉ちゃん、たまには休んだら？ いつも無理に仕事終わらせて……」

「大丈夫だよ、愛奈と一緒になら」

そんなことを言いながら杏は愛奈に頼ずりをしてくる。苦笑いを浮かべ愛奈はそれから逃れるため杏をやりわりと押し返した。そして階段に足をかける。

「わたし、これから塾だから。着替えてくるね？」

「はいはい」

最近の杏はなぜか『シスコン』が激しくなってきたように感じる。しかし、嫌だと感じたことはないし、自分が杏の支えになっているのならそれでもよかった。

「……ふう」

かばんを机の横にかけ、手早く着替えを済ませる。塾に行くときは決まってズボンをはいていく。スカートはいていると足元が冷えて集中できないのだ。

そして塾まで30分。塾は近所にあるため、行くまでにさほど時間はかからない。それまでやることは決まっていた。

『DEAR・RUNA』

最近むちゃくちゃ忙しい(汗

部活大変だよね><

今度の土曜日、未来と一緒に出かけない？

返事待ってます(^^)ノ

FROM・AINA』

親友の瑠奈にメールを打った。

「送信つと……………」

ケータイの画面に

『送信されました』

の文字が出る。普通なら、メールを送れてホッとするとところなのだろうが、今日はなぜか安心できなかった。安心するどころか、少しだけ……胸の奥が痛んだ。

そして、不思議なことに『あの』言葉が脳裏によぎった。

『カノジョとかきょーみないの?』

帰り際、未来に言ったあの言葉。あの言葉は、瑠奈に関する言葉だ。

「（ま、いつか……）」

愛奈は頭を軽く振り塾の準備をする。全て終えてから愛奈はケータイを無造作にポケットへと突っ込む。

ストラップは未来から誕生日プレゼントとしてもらったピンク色の星のストラップと瑠奈からもらったお揃いのリラックマのストラップしかついていない。

女子高生ならやっていそうなケータイを『デコる』ということもしない、白の薄型のケータイ。

「（デコるとか、めんどくさいしな……）」

そんなことを思いながら愛奈は部屋のドアを開け、階段を下りる。

「もう行くの？」

杏が足音を聞いたのか晚ご飯の準備をしながら聞いてきた。愛奈は頷く。

「うん。早く行っておかないと。何があるか分かんないし」

「愛奈は心配性だよね〜でも、気をつけて行ってきたよ」

「はい。行ってきます!!」

愛奈は玄関のドアを押し開け外に出ると、秋に向かっていている季節のせいか風は少し肌寒かった。

帰ってきた時もそうだったが曇天は晴れる様子を一切見せない。今日は星も月も、夜に輝きを増すものは何も見えなかった。

見上げた夜空に何も浮かんでいないことを少し残念に思いながら  
愛奈は塾へと足を運ばせた。

## 夜空【AINA】（後書き）

本当は塾に行つてからの事も書こうと思つたのですが……

途中で作者の頭がフリーズし、内容が吹っ飛んでしまいました（；

！：）

お許してくださいm（——）m

## 輝き【MIRAI】

放課後。

バスケ部に所属している未来は部活のため体育館に来ていた。秋になると新人大会がある。そのために現在バスケ部は練習に力を入れているのだ。

ちょうど今は休憩を終えて次の練習メニュー『5対5』の試合形式の練習をしている真つ最中だった。

「リバウンドっ！！しっかりとって！！」

愛奈の声が体育館の中に響き渡る。コートの中を駆け巡る未来の耳にも届くほどの声の大きさだった。

愛奈はバスケ部のマネージャーを務めており、常に選手の動きに目を光らせている。ある意味コーチより怖いかもしれない、と言ったら言い過ぎかもしれないが。

その時、ボールを取った仲間が囲まれ、動きが止まった。

「っと」

近くにいた自分のもとにパスが回ってくる。とりあえずドリブルをついてフロントコートまで運ぶが、相手の守りがディフェンスなかなか堅い。

「（どーっすかな）」

ドリブルをつきながらどうするべきかと考える。今相手にマークされていない仲間はいない。

もちろん、ボールを持っている未来のところにも、『ゴールには行かせまい』と言った表情で睨みつけてくる同学年の『いはやそつ依早湊』が

未来をマークしていた。

「（……行くっきゃねえよな）」

時間も残りわずか。この状況からしてうだうだとパスを回してカットされるよりも、自分で突っ込んでシュートを決めたほうが先決だ。

未来は姿勢を少しだけ低めて湊を振り切った。足には自信がある。

「つつ！」

いきなりスピードを出した未来に驚いたのか湊のそんな声がかすかに聞こえた。仲間を守っていた相手も慌てて未来をマークする。だが。

パス。

未来のドリブルシュートは見事に決まり、相手の攻撃になったところで試合が終わった。

「相変わらず足だけはすげーよな？」

そう赤い顔で息を切らしながらちやかしてきたのは湊だった。

未来はタオルで汗を拭きながら唇を尖らせる。

「んだよ、『足だけは』って！！オレだっている頑張ってるんだっての」

「どーだかなあ。自分で思ってることよりも世間の目は厳しーぜえ？」

「へーへーそうですね」

適当にあしらって部員を集めていたコーチのもとへと急ぐ。コーチは元バスケット部部長を中学高校と続けていたすごい人物だ。そんなコーチは未来の憧れでもあった。

「よし。今日の部活はこれで終わりだ。1年生、片付け頼んだぞ」

そう言ってコーチは踵を返すとそのままひらりと手を振りながら体育館を出て行ってしまった。

コーチは何を考えているのか……大会まで一か月ないというのに、なぜ早々と切り上げるのだろうか？未来にはわからなかった。

「未来、おつかれ」

愛奈の声にハツとして振り返ると後ろにはジュースを持った愛奈がいた。

「お、サンキュー」

愛奈から差し出されたジュースのボトルを受け取ってから未来は微笑む。

「最後のシュート、あんな所からよく決めたね。無理な体勢だったから絶対に入らないと思ってただけ……」

愛奈がゴールを方をちらりと見てそう言った。その言葉にまた唇を尖らせる。



「オレの中では確信してたの！てか、あんだだけ一斉に囲まれたら無理でも打たないって思うじゃん」

「そーかもね」

未来の説明にくすりと笑って愛奈は「先に行ってるから」と体育館を後にした。

「ごめん、遅くなった」

「だいじょーぶ。そんなに待ってないから」

愛奈はそう言つと校門の壁から背中を離し、スクールバッグを肩にかけ直す。慌てて学校から飛び出してきたので内心息が苦しかったが、愛奈の手前、そんな表情はできない。

「（カツコ悪いしな）」

不意にそんなことを思つて、未来は心の中だけで苦笑いした。

風がどこからか吹いて来てひゅう、と二人の髪や制服を揺らす。

風は冷たかったが、今は心地よかった。小さく息を整えながら未来は家路を歩きます。

「さて、帰りますか」

「そうしますか」

そう言っただけ笑いあふ未来と愛奈。幼馴染の二人は他人<sup>ひと</sup>からみればカップルだろうが、未来はそんなことを思ったことはなかった。一度も……なかったはず。

街を中を歩いて行くとぼつぼつと明かりが付き始め、夜の訪れを知らせてくれる。その景色を見るのが未来は好きだ。

淡い明りが輝く街は昼間よりもきれいに見える。その景色は昔から未来の好きなモノでもあった。

闇が濃くなる一方で街の輝きは闇を照らし、だんだんとにぎわいを増していくのだった。

輝き【MIRAI】（後書き）

幼馴染の二人。仲が良かったために……  
っていうのを追求したいと思います。

## 天光 【AINA】

「土曜日？瑠奈と？」

昼休みの中庭。

愛奈は未来を呼び止めて今週の土曜日、瑠奈と約束していたことを話した。

しかし未来は首を少しかしげて「なんで？」と言ったような顔をする。愛奈はその表情に少しムツとして未来に指を突き付けた。

「どーせ暇なんでしょ？ちよつと付き合いなさい」

「……まあいいけど。オレは『暇』だし！」

そう『暇』のワードを強めて唇を尖らせた未来の顔はまるで幼いころを思い出させる表情だった。心の中で微笑むが表情は未来と同じように愛奈も唇をとがらせる。

「いつまで経っても子供なんだから……少しは大人になりなさいよ！」

「るせー！！愛奈だってガキの頃からそればかりじゃねーか！つたく、母親じゃあるまいし……」

いつもの喧嘩。しかし、未来の最後の呟きに愛奈はどこか寂しさを感じた。

……だが、理由なんてわからない。あの短い呟きに何の意味があったのだろうか？自分でもわからないことが不思議だった。

だが、深くは考えない。昼休みだとはいえ、クラスの男子がどこ

で見ているか……気を配らなければならないのは正直メンドクサイが仕方がない。

愛奈はそれを忘れようとするように不満そうな未来の背中をいつものように　いやいつもよりも思いつき叩いてやる。

「イテ！ちよ、強すぎ！あー背骨折れた〜」

芝居まぎれに大げさな動きで背中をさする未来に愛奈は手を引つ込めて顔をそむけた。

「馬鹿言っでないでしゃきつとしなさい！！子供扱いされたくないからねっ」

そう言いながらも心の中で「少し強すぎた」とうなだれた。幼いころからこのやり取りは続いている。

愛奈にとって未来は『弟』のような存在であった。

だから、つい言いすぎてしまう。それは自覚はしているのだが治しようがない。

未来は背筋を伸ばすと敬礼の真似をした。

「ほら、これでシャキツとなっただろ？」

そういつていたずらっぽい笑顔を浮かべる未来に愛奈は少しだけため息をついた。

……未来に何を言っても通じはしない　そう思った瞬間だった。

放課後。

部活を抜け出し、愛奈は美術室に向かっていた。理由は『親友<sup>るな</sup>』に会うため。

美術室の前で足を止め静かに扉を開く。そこには外の風景を描く、『瑠奈』の姿があった。

「瑠奈」

「あ、アイちゃん！来てくれたんだあ」

がたん、と音をたてて椅子を押し、瑠奈はたたたと小走りにやってきた。

瑠奈は高校でできた『親友』だ。

背も小さいし、顔も声も可愛い。性格だって優しくて明るいいし、成績もいいが体が弱いらしく体育には出られない。いつも見学していた。そんな彼女はクラスの『人気者』だ。

愛奈はそんな彼女を『アコガレ』の存在だと思っていたが、彼女と『親友』になってからは、純粹にクラスメイトと同じく彼女の事が『好き』だった。変な意味ではないが。

瑠奈は優しい微笑みを浮かべながら、「今日はどうしたの？」と首をかしげる。

「アイちゃんが部活の仕事をさぼってまで来るなんて珍しいーね」

「さぼってるわけじゃないんだよ？　それより早く瑠奈に伝えたくて！」

苦笑いの後に瑠奈の両手を握りしめた。瑠奈は突然両手を握られたことにかなり驚いた表情を浮かべる。だが愛奈は気にしない。

「瑠奈！土曜日良いつて！よかったね！」

「え？ほ、ほんと？ほんとに？」

うつすらと頬を赤らめて問うように愛奈を見つめてくる瑠奈の表情はどうしようもなく可愛かった。

女の自分が可愛いと思うのだから誰が見ても今の瑠奈はテレビで出ているアイドルやモデルよりの数倍可愛い。……さすがに言いすぎかもしれないが。

愛奈はそんなことを思いつつ大きく何度もうなずく。

「ほんと、ほんと！あ……楽しみだなあ土曜日」

「う、うん……き、緊張するなあ……」

そう言っって少し困ったように微笑む瑠奈。顔はまだ赤い。

愛奈は瑠奈を手を離すとガッツポーズで思いつきり微笑んだ。

「だいじょーぶ！！あたしも出来るだけの事はするから！」

「うん……ありがと、アイちゃん！わたし、頑張るねっ」

そう言い会って笑いあう二人の少女は本当に幸せそうだった。

『親友<sup>るな</sup>』のためなのだから、今は何があっても自分のできるだけ  
の事はしておきたい。

それが、瑠奈のためになるのなら……自分の曖昧な感情は今はどうでもいいと思った。否、追求するのも面倒だった。

複雑な感情を心の隅に置いたまま愛奈は冷たい廊下を一人静かに歩いていく。

そんな彼女を見守るのは暖かな太陽の日差しだけだった。



天光 【AINA】（後書き）

ああ・・・

訳分からんことに・・・

何かありましたらお伝えください m  
———  
m

## 鈍感 【MIRAI】

遂に土曜になり、未来は愛奈に指示された場所に立っていた。

『あのショッピングセンターあるでしょ？その前で10:00に来てくれない？』

愛奈に言われた通り10:00に来たのだが……

「……んだよ。まだ来てねーじゃん」

未来はズボンのポケットに手をつ込みため息を漏らした。周りを見てもいるのはただ忙しく通り過ぎていく見知らぬ人ばかり。家族連れもいるけれどほとんどは仕事があるのかスーツを着ている大人ばかりだ。

もともと人が多いところが好きではない。ごみごみしていて……歩くのも人にぶつからないようにしなければならぬからメンドクサイと言つのもある。何より……体が拒絶する。理由は分からないが……嫌なことに変わりはない。

未来は壁に寄り掛かると持ってきたiPodを取り出してイヤホンに付け、音楽をかけた。これと言って何を聞きたいわけでもない。ただの暇つぶし。適当に選曲して再生ボタンを押す。それと同時に音楽が耳に入ってきた。

音楽に耳を傾けるわけでもなく、未来はただぼーっと空を見上げ二人が来るのを待っていた。

「ごめん！！時間かかった！！」

そう言いながら慌てて駆け寄ってきたのは愛奈。そしてその後ろからおずおずと瑠奈がやってきた。

瑠奈はこちらを見ると少し恥ずかしそうにしながら柔らかに微笑む。

「お、おはよう」

「よーっす……って愛奈！！おせーよバカ！！」

「はあ！？仕方ないでしょ！着替えるのに時間かかったんだから！！」

「んなこと知るかっ！！30分も待たせんな！！人多いし変な目で見られるし……」

「あーあーわかりました！！いちいち細かいんだから……」

愛奈は首を振って呆れたように肩をすくめた。その行動になんとなくカチンと来たがまた言い争いをするのも瑠奈に迷惑がかかる。それくらい、自分でも考えればわかった。

「まったく……ここ見て回るんだろ？早くいこーぜ？」

「うん。そーだね！アイちゃん、行こう？」

「はいはい」

未来はパーカーのポケットに手を突っ込みながら店の扉を押し開け、二人が入ってから閉めた。

未来の前を通過して行くときに瑠奈が「ありがと」と言って微笑む。愛奈はそのまま通過していった。

「（可愛くねーやつ。瑠奈とは大違いだ……）」

自分の幼馴染は一体どこから変わってしまったのか……そんなことを考えながら未来は楽しそうにショッピングセンターを見回している少女たちを後ろから見つめていた。

さんざん店を回り2時間。すでに12:00を軽く超えている。その時すでに未来は精神的にぐったりしていた。内心ため息をつき、無言で愛奈たちの後を追う。すると愛奈が不意にケータイを開いて「あっ」と言った。

「もうこんな時間……お昼にする？」

「うん。あの……未来君、大丈夫？ 疲れてるみたいだね」

「あー……へーきへーき。気にすんな」

心配そうに声をかけてきた瑠奈に未来はひらひらと右手を振ってそう言った。内心疲れていたし、もう帰りたいのだが……そんなこと言ったら恐らく愛奈からの怒りを買うことにだろう。それだけは

ごめんだ。

未来たちはハンバーガーを買い、席に着いた。

「てかさ、未来さつきから何にも言わないじゃん。何？いつものテーションはどこに行ったのかな？」

「うつせー！……人多いところ、嫌いなんだ」

未来はハンバーガーにかぶりつき、そつぽを向いてからそう呟く。その呟きを聞いたのか瑠奈が眉をひそめて申し訳なさそうな顔をした。

「そつか……ごめんね？わたし、一度行ってみたかったの……と」

「？なんか言った？瑠奈」

「えっ！？何でもない！！何にも言っていない！！気のせいだよ！！」

瑠奈は慌てて大きく首と手を振りジュースを一気に飲み込む。その様子に愛奈がくすりと笑ったのが分かった。瑠奈はそれに気づいたのか、かぁと顔を赤らめ、うつむく。

だが未来にはその行動の意味がわからなかった。声をかけてはいけなかったのか？

訳の変わらないまま未来はジュースをズーっと飲み込んだ。

そんな自分を見て幼馴染が悲しそうな顔をしていることに気づかず。

鈍感 【MIRAI】（後書き）

久しぶりの更新です。

内容があれですが、午後の予定は愛奈視点で行きたいと思います。

## 思い【AINA】

ショッピングセンターで昼食を済ませ、愛奈たちはショッピングセンターからカラオケ店へと向かっていた。

「なんでカラオケなんだ？」

未来がまるでどこかの小学生のような口調で話しかけてきた。振り返って彼を見ると彼は朝と同じようにパーカーのポケットに手を突っ込み、頭にはフードをかぶってたらだと愛奈たちの後をついて来ている。

愛奈は心の中で「しゃきつとしろ」と思ったが、瑠奈が楽しそうに未来を見ているのでそこは言わないでおく。

「いいじゃん。未来歌うまいし。人の少ないところって言ったらカラオケでしょ？」

「どんな解釈だよ、おい……」

「でもみんなでカラオケっていいね〜楽しいもん」

「そーそー。だから文句言っな」

「あーあーわあったよー!!じゃ、口にチャック」

そう言って口の左端から右端にかけてチャックを閉じるようにした。愛奈は大きなため息をつき、首を振る。

……これじゃあ小学生と話をしているようなものだ。瑠奈は一体こんなやつどこに『惚れた』と言っのか……



……簡単に要約してしまえば、今日の予定は『瑠奈のため』。瑠奈は未来の事が好きらしい。

「（あたしから見たらただのガキンチョなんだけどなあ……）」

隣でにこにこ嬉しそうに歩いている親友るなと後ろをだらだらと歩いている幼馴染みらいを交互に見て小さくため息をした。

彼女のため息を聞いたのはこの街の誰もいない。そう、誰もイナイはず

「これ。次、瑠奈だよ」

「あ、うん。ありがと未来君」

瑠奈は未来からDAMの機械を受け取り「何がいいかな」と呟きながらタッチペンで画面を叩きながら曲を探し始めた。未来はそれを見て少しだけ微笑んだ。その姿に愛奈の心はなぜか……痛む。ズキズキと。

だが愛奈は歌を歌っていたためそんなことを考えている暇も、二人を見ている暇もない。それに　こんな感情、自分は　自分にはないはず。なにせ、知らないのだから。

それに　自分に本当の感情など　……

「（あ……終わった）」

そんなことを考えながら歌っているうちに曲が終わっていた。ほ

とんどぼーつとしていたので、点数は……

「何コレ。ちょー低い……」

75点。好きなアニメの曲。この前歌ったときは88点も行ったのに、なぜこんなにも下がってしまったのか……

「愛奈、途中から声めちゃくちゃ小さくなってたけどー。どうしたんですかー」

明らかに棒読みで未来がいたずらっぽい笑みを浮かべながら声的にそんな感じだった。そう言うのが背中に聞こえる。愛奈は体温が急速に上がるのを感じた。

「う、うるさい！！ほら、次未来の番だよ！！」

そう言ってマイクを未来に押しつけるようにする。未来はニヤニヤと笑いながらマイクをするりと愛奈の手から取った。そしてマイクの電源を入れたり消したり……

愛奈は自分の中で何かがぶち切れ、叫んでいた。

「さっさと歌わんかアホ！！」

「るせー！！俺の癖なんだよ！！」

「み、未来君。マイク持って叫ばないで……」

瑠奈が愛奈のすぐ近くまで来てはあ、とため息をついた。どうしたのだろうか？愛奈は心配して彼女の顔を覗き込む。

「……どうしたの？瑠奈」

「アイちゃん……わたし、アイちゃんみたいに話せないよ……なんか、きんちよーしちゃう……」

「んー……大丈夫だよ？普通に男子と話す感覚で行った方が未来も楽じゃないかな？」

愛奈が言いきると未来の歌が始まった。曲は『アゲハ蝶』。

歌うその横顔は本当にあの未来なのか？と思うくらい、大人びていた。

「……かつこいーね、未来君。いいなあ、アイちゃん、未来君みたいな幼馴染がいて……」

「ええ……あんなのが幼馴染ならきつと瑠奈も冷めてると思うよ？うるさいし」

「そーかなあ……」

少し羨ましそうに未来を見つめながら言った瑠奈に愛奈は首を振って否定した。言ってることは本当だ。本当の、本当。嘘なんかない。

けど……今の幼馴染みらいは今まで見たことがなかったくらい……カッコいい思った。……少しだけが。本当に少しだけ。アリくらい。いや、ミジンコくらい。

ツンデレじゃない。絶対に違う。あり得ない！！

愛奈は自分の頭によぎった言葉に自分で否定して自嘲気味に微笑んだ。

それとは別に……未来に焦がれる瑠奈が羨ましいと……小さく思った。

## 思い【AINA】（後書き）

カラオケいいですねー！！

この前行ってきました！！しかし点数でないですねー。最高88点ですよ、愛奈と同じです。

……それにしても田舎のカラオケ店はやっぱり曲が少ないんでしょうか？県庁所在地にすんでいるいところが来たときに

「え！？　　ないの！？」

と言われました。

DAMって全国共通ですよね！？え、東北だけじゃないですよね！！

## 混乱【MIRAI】

愛奈たちと出かけて3日。もう火曜日だ。

それにしても最近授業に身が入らない。もうすぐ新人大会があるからだろうか……部活の事ばかりが頭に入ってしまう。

「おい。み〜ら〜い〜」

「あ？何？蓮<sup>れん</sup>」

こいつは須藤蓮<sup>すどうれん</sup>。未来の親友で未来の次に頭がいい。まあ、学年2位と言うことだ。

蓮は未来の前の席で、よく話をしながら授業を受けている。今日も蓮は話しかけてきたが……いつもと少し様子が違う。どうしたのだろうか？

「どうした蓮。そんなに焦って」

「どうしたじゃねえし！お前、しらねえの？バスケット部のコーチいるだろ？なんかやめるらしいぜ」

「ええ！？」

思わず大声をあげてしまい、また先生からの注意が飛んでくる。だが、未来はただ平謝りしたが、頭の中はひどく混乱していた。

「コーチ！！どういうことですか！？なんでこの時期に……」

未来は昼休みにコーチの佐々木優斗ささきゆうとに会うべく職員室にいた。目の前にはコーチがおり、周りに他の先生たちもいたが今はコーチの真意を聞くためのことしか頭に入っていなかった。

未来の荒々しい質問にコーチはいつもの穏やかな口調で答えた。

「ん……俺にもいろいろ訳があるんだよ。仕方ないだろう？」

「そんな……！俺たち、後1週間で大会なんですよ！コーチの指導がなくなったらどうすればいいんですか！？」

今バスケ部の顧問はバスケ初心者の女教師でとてもじゃないが教えられるような人ではない。それだけに未来にとってコーチの存在はとても大きいのだ。それなのに……。

だがコーチはあくまで微笑みを絶やさない。

「なんとかなるだろう？お前たちの力なら」

そのコーチの発言と微笑みに、未来は

「簡単に済ませないでくださいっ！！俺は　俺たちは優勝したいんです！！けど　」

未来は唇を噛み、うつむく。握った拳が震え、目頭は熱くなりそうだった。本当に……自分たちの不甲斐なさに、悔しくて。

周りの先生が何事かとこちらを見るのがわかったが、気になどしていられない。

未来は絞り出すようにして声を出した。

「けど……俺たちは、まだ……まだ弱いから……全然練習試合では勝てないし、やる気はあるんだけど……やっぱり実力が全てで……」

そこまでいうとコーチの眉がピクリと動き、その穏やかな顔は怒りにゆがめられた。

未来はそのあまりの剣幕に押され、言葉をなくす。何か口にしようとしても言葉が喉で詰まってしまいうまく出せない。それほど……コーチの顔は怖かった。

「実力がすべて……確かにそうかもしれない。……だから俺はやめるんだよ。俺の力じゃ……お前たちの実力は上げられないどころか、その実力を下げてしまう。……それにな」

コーチの言葉が詰まり、顔は怒りから苦渋にゆがんだ。

未来も周りの先生も何も言わない。この職員室くわかんに流れるのは教室や廊下から聞こえてくる生徒たちのはしゃぐ声だけだった。

……そうして何分経っただろうか？チャイムが鳴る時間ではないところからするとまだ3分程度だろうが未来にはそれが酷く長い時間に感じてこのまま逃げだしたい気持ち徐徐に募って行った。

そのとき、コーチがやつと口を開いた。

「もう、俺はバスケができる体じゃないんだ。左腕に……な。マヒが起きていて、もうほとんど何も感じなくなってる」

「……そ、そんな……」

未来は驚愕に見開かれた目をコーチの左腕に向ける。普段ポケットに手をつ込んでいたため気づかなかったが、よく見るとだらんと垂れているようにも感じる。



あまりのことにもう頭がパンクしそうだった。未来はただ呆然と立ち尽くし……なぜか笑っていた。

「あは……ははは！もうどうだっていい！俺たちのヒーローは呆気なく病氣してやめんのかよ！あはははは！！」

訳のわからないまま職員室をゆっくりと出る。コーチの隣を過ぎていくとき、彼の顔がものすごく悲しそうだったような気もしたがもうどうだって良かった。

未来はふらふらと教室の前に戻ると不気味な笑い声をあげながら泣いていた。

「……未来？」

いぶかしむように幼馴染<sup>あいな</sup>が後ろから声をかけてきた。ゆっくりと振り返り、未来は目に映った愛奈に狂った微笑みを見せた。

「なあ、愛奈。俺たち、見捨てられたのかな？左手が動かないだけで、バスケ教えられないってさ！なんなんだよ！訳分かんねえ！」

「未来！落ち着いて！どうしたの？おかしいよ！」

愛奈の細い指が自分の肩に置かれ軽く揺さぶられる。未来はもう、混乱し何が何だか分からない状態だった。

今、未来の中に『ココロ』がない。あるのは、ただの闇と混乱。その時、愛奈が未来の頭を平手打ちした。しかもものすごい強さで。

「つつ！な、何すんだよ！！」

「いい加減、目え覚ませ！！七峰未来！！アンタ何してんの？ただ何も考えずに何言ってるの？落ち着きなさい！！」

愛奈の一括でクラスのやつらが全員何事かと廊下に出てきた。その中に親友の姿も見える。

未来はこのざわめく生徒たちの声にココロを取り戻した。落ち着き、呼吸も楽になる。

正直なにがなんだがよく覚えていない。覚えているのは職員室に行つて、コーチと話して、それから……

「落ち着いた？」

愛奈の心配そうな声に未来はハツとして頭を振った。そして彼女に向かって頷く。

「ああ、うん。ごめん、俺なんか……」

「それならいいけど」

愛奈はそう言ってプイツとそっぽを向いてしまった。その横顔が微妙に赤くなっていたように感じるのは気のせいだろうか？

キーンコーンカーンコーン……

チャイムが鳴り、クラスのやつらはみんな教室に戻って行く。あ  
るものは未来をまじまじと見ながら、またあるものは特に興味もな  
さそうに。

やはり、自分だけなにか人と違うのだろう。だから、コーチにあることを言っじぶんて混乱して……

きっと誰も未来の事には気づきづいてくれない。気づきづいてくれていたとしても、それは同情だ。

やっぱり……俺は『孤独』なのか？

混乱【MIRAI】（後書き）

未来君暴走！（＊、A、）

まじでサーセンorz

## 予感【AINA】

初めてみた。あんなに混乱した幼馴染を見たのは。

部活のため体育館に向かう愛奈は一人、暗く、冷たい廊下を歩いていた。この廊下は日当たりが悪く、なんだか不気味だ。

それと同じで……

「（さっきの未来も……）」

そこまで考えて、愛奈は自分に吐き気を覚えた。右手で左腕を握りしめる。爪が食い込んでくる痛みに耐えながら、自分のさっきの考えを消した。消しさった。幼馴染の彼を見捨てるようなことの考えた自分に……嫌気がさす。

だが……先ほどの未来はどこかおかしかった。笑い声も、表情も。精神的な何かがあったのだろうか？愛奈にはわからなかった。

「アイちゃん！」

優しい、柔らかな声が耳を打った。愛奈は左腕から手を離し、声の持ち主 瑠奈に手を振った。

瑠奈は手を振りながら小走りに愛奈の隣までやってくると急に顔色を変え、愛奈の左腕を取った。

「アイちゃん、これどうしたの!？」

「えっ？」

「え、じゃないよ!血、血出てるっ!！」

瑠奈の言葉に戸惑い、愛奈は自分の左腕に視線を落とした。見ると、先ほどまで握っていた二の腕のあたりから血が流れている。Ｔシャツだからなおさらよくわかった。

「あ、あはは！ご、ごめん、握ってたら食い込んでたみたいだね。うわあ、痛いわあ……」

「もう！あ、ちょっと待ってね」

瑠奈は自分の持っていたスクールバッグから消毒液と絆創膏を取り出す。そしててきぱきと愛奈の腕の処置をしてくれた。

「あ、ありがと……ってなんでこんなに用意周到なの？」

苦笑いしながら愛奈は処置された腕から瑠奈に視線を戻した。だが瑠奈はまだ眉間にしわを寄せている。

「用意周到にもなるよう……アイちゃん、力加減できないからいつもケガするじゃん」

確かに。愛奈は頷いて微笑んだ。

「まあ、ありがとね！で、どうしたの？用事はこれじゃないでしょ？」

「あ、そうだった！！」

瑠奈はポンつと手を叩くと愛奈の顔を覗き込む。その瞳はいつもとは違う、悲しげな光を放っていた。

「アイちゃん聞いた？バスケット部のコーチ。やめちゃうんだって」

「ええっ！！ウソっ！？マジで？」

愛奈は驚きすぎてとっさに瑠奈を両手首をつかむ。それに驚いたのか瑠奈は目を見開き、パクパクと口を動かしてからゆっくりと頷いた。

「う、うん……さっき蓮くんに教えてもらったの。そ、その……未来君の様子もおかしかったから……」

「あ……」

瑠奈が視線をそらしながらそう呟くように言った。愛奈もそれは同じ。

これで未来の混乱の意味がわかった。新人戦が近い、この時期で未来はきつとピリピリしているはずだ。その時にこの事態では……

「ありがとね、瑠奈。あたし、部活見てくる。瑠奈も部活頑張ってる！」

「あ、うん！！じゃあね！」

軽く手を振ってから愛奈は廊下を駆け出した。まっすぐ行けば体育館。

暗い廊下は酷く冷たかったが愛奈は構わず走り続けた。

「あ、水崎！」

「蓮！……ねえ、コーチが辞めるって話……」

「……うん。本当らしーぜ。未来に言ったら、その……」

「気にしないで。アイツが先走っただけだし」

体育館に着いたときに蓮が話しかけてきたのでコーチについて聞いてみると本当だったらしい。

愛奈はそつと蓮の肩越しに未来の姿を見つめたがその背中はいっになく……冷たかった。暗かった。実際はそうではないけれどそう、感じた。

「とりあえず、未来には帰りに聞いてみる。部活続けてて？」

「あ、ああ……」

蓮にそう告げて愛奈は部室の片づけを始めた。  
その背中を見つめる人がいることにも気付かずに

「未来」

「お、遅かったな」



「んー……ゴメン」

笑いながら言ったけれども……ちゃんと笑えていただろうか？

愛奈はあの後、男子バスケット部長、女子バスケット部長とともに校内放送で呼び出され職員室へ向かったのだ。

そして告げられた。あの噂の真相を。

「今週いっぱい俺はコーチの職を退職することになった。残念だけど……これからは遠くからお前たちの勝利を祈っているよ」

コーチの言葉はこれだけだった。そう、これだけ。

愛奈は言葉もなく部長たちと共にただただ顔を見合わせ、「ありがとうございました」と頭を下げた。

やめてしまうのにこれだけの言葉しかなかったのだ。愛奈には「なぜ？」という言葉が頭の中を駆け巡っていた。

「愛奈？どうした？」

その声にハツとし、愛奈は我にかえる。目の前には夕焼けの逆光で輪郭を縁取られた未来の顔があった。少し離れ、顔をそらす。

「ゴメン。ただの考え事」

「あつそ……あのさ」

未来は愛奈の隣に並ぶと気まずそうに視線を足元に落とした。その横顔はやけに……大人っぽい。

別にカッコいいと思ったわけではない。

「その……今日、ゴメンな。俺、おかしかったよな？マジゴメン」

そう言っ て頭を下げる未来。 その姿が妙に遠く見たのは気のせいだろうか？

愛奈は未来の頭をポンポンと叩くように撫で、ニヤニヤと笑ってやる。

「いーのよお、別にい！愛奈ちゃんがいなかったら未来君はどーなっただことか……」

「ぷっ！！なんだよその言い方！アハハハ！」

「うっわ！失礼だな！！ほんとの事じゃないのよ！！」

いつもの喧嘩。やはり……気のせいだ。 未来は未来。 愛奈の幼馴染であることには変わらない。  
たとえ何があっても。

だが、この出来事をきっかけに愛奈と未来はすれ違い始めるのだ

## 予感【AINA】（後書き）

さてさて……久しぶりの更新です!!

中身はあれですよ？

続きが楽しみになる書き残し方しましたよ？

え、だってその方が妄sブツ（´（〃（°。（´（

ありがとうございました？

## 秋空【MIRAI】

なんだか気が冴えない。特にこれと言って思い当たる節はないが

……

未来は部活の練習中、フツとため息をついた。

コーチは結局この高校のバスケット部を去って行った。それからもうすぐ1週間。それはつまり新人大会の始まりを告げるものだった。

未来たちの高校の相手校は『丘の上高等学校』。そこそこ偏差値も高いし、バスケも強い。いわゆる強豪校だ。

よりにもよって相手がこれじゃあ結果なんて……目に見えたようなものだ。

「はぁ……」

「そこおー!!」

「イテツ!? 誰だよ!？」

言葉と共にバレーボールが飛んできた。それは未来の後頭部に直撃し、未来は声を荒上げながらそのボールが飛んできた方向を睨みつけた。

その先にいたのは

「なーにが『誰だよ』だつての!! さつさと走れアホ未来!!」

またこれだ。愛奈の言葉に未来はまたため息をついた。愛奈もピリピリしているのだろうか? 最近急に厳しくなった気がする。もしかしたらコーチがいなくなったから、その分頑張っているのか? それもあり得ないことではない。

そんなことを考えつつ未来は少しでもだけ気を取り直してコートの中を駆け巡った。

「まったく未来と愛奈は仲いいよな」

「どっからどー見たらそーなんだよ……」

湊が笑いながら声をかけてきたと思ったたらいきなりそんなことを言ってきた。未来はうんざりといった表情を浮かべながら首を振った。

練習時間もとわずか。今は最後の練習メニューの前に休憩をとっている。

休憩時間になると男子も女子も仲良く話し始める。やはり同じ部活内でのカップルは多く、バスケットだけでも部員の半分は女子バスケ部にカノジョがいるやつらばかりだ。

「愛奈くらいならすぐにカレシ、できそーだけどな」

「はあ？あんな暴力女のどこがいいんだよ？意味分かんねえ……」

「ははは！よく言うなあ。幼馴染だろ？」

湊は笑いながら愛奈を見つめる。未来も愛奈を見ると愛奈は他の男子部員に囲まれていた。正確に言うともまあミーティング的なものだが、湊の言うように愛奈はまあ……顔もいいし頭もいい。スタイルだってそこそこだし、まあモテると言えばもてるのだろう。

愛奈の囲んでいる部員の中にも結構な人数が愛奈を好いていると  
いうのだから驚きだ。

「ってか、なんでそんなこと気にしてんの？あ、もしかして……」

未来は湊の横顔を見ながらにやりと笑った。すると案の定、湊は  
慌ててこちらを振り返った。

「な、バカ！！んな訳ねーだろ！？オレがいつ愛奈の事好きだって  
言っただろ！？」

「バーカ。オレはそこまで言っただろよ」

「……ちえ。隠してたのに……誰にも言っただろ」

「わーってるよ」

適当にあしらって未来は立ち上がり、グツと背伸びをした。背骨  
がぽきぽきとなり、少しでも気分が晴れた気がする。

湊は顔を赤くしたまま未来の顔を見上げてふう、とため息をつい  
た。

未来はそんな友に温かな微笑みをこぼしながら愛奈へと目をやる。

愛奈は 愛奈の横顔は未来の知っている愛奈より、大人びて、  
綺麗だった。

「で、明日は夜練もあるんだ？」

「そ。参加できるか聞いて回ったらみんな大丈夫だった」

「そっか。よかったな、みんな来れて」

帰り道。未来は愛奈から明日の予定を聞いていた。どうやらさっきのミーティングは夜練の事について話していたらしい。

最近は日が落ちるのが早く、空には星が投げ出されたように輝いていた。その輝きが妙に悲しげに見えるのは、オレだけか？

「何したの、未来？星見るなんて珍しーね？」

「あ？別にいいじゃん。たまには見たくなんのー!!」

「あはは！そっか、未来もそーゆーの好きなんだね。あたしも好き」

『大好き』。その言葉にドキツとした。一瞬だけ。

隣の愛奈を見ると優しい微笑みを浮かべながら星空に目をやっていた。その横顔はいつもの愛奈。怒りっぽくて、ほんの少しだけ女らしい幼馴染。……別に変な意味で言っただけではないが。

じーっとその横顔を見ていると愛奈が急にこちらに目を向けてきた。突然目があって未来は視線を泳がせる。

「なんでジツと見てんの？何かついてた？」

「あ、いや。髪長いなあって」

「はあ？何ソレ」

そう言つと愛奈はくすりと笑って視線を前に戻した。未来はホッ

と胸を撫で下ろして心の中だけでため息をつく。

幼馴染なのになんでこうも変わってくるのだろうか？昔は兄弟のように何をするのも一緒に遂には高校まで一緒になって。

それなのにここに来て今さらながら男と女の差が見に見えてなんだが少しさびしいと感じた。

新人大会。それまでに気持ちの整理がつくといいのだが……



秋空 【MIRAI】（後書き）

……すみませんでした。

全然更新していませんでした。それどころか話がまたしてもこっちやごちや!!

あはは もういいや （ふざけんな）

## 記憶【AINA】

今日、これから夜練がある。愛奈はふうとため息をつきながら荷物を詰めていた。

明日はいよいよ新人大会。自分たちの代、と言うことも影響しているのだろう、緊張する。

マネージャーが緊張してもあまり意味はないのだが……

「後悔はしてほしくないなあ……」

手を止め、ぽつりとつぶやく。フロアリングをばーっと見つめ、愛奈はペタンと腰を下ろした。

せめて、未来たちには決勝まで行ってほしい。

愛奈が高校に入って初めての大会では見事優勝を飾り、県大会まで駒を進めた。だが、県のレベルは高い。県大会では一回戦敗退という結果で終わってしまったのだ。

今の三年生の代の新人大会は勝機こそ見えたものの最後の一步が足りず、4点差で一回戦敗退。

そして今年の総体では二回戦まで進んだものの『丘の上高等学校』

今回の相手校のに負けてしまった。

だからこそ

「県大会、なんて無理かな……？」

高望みしてしまうのだ。

静まり返った夜の高校。その横の体育館だけが明るく輝いている。バスケ部の夜練だ。

愛奈は色々考えているうち、準備することを忘れ慌てて家を飛び出してきたのだった。

もちろんのことだが、完全に遅刻だ。

大慌てで高校の門をくぐると一年生のものだろう、甲高い声が外まで聞こえてくる。愛奈は荒れた息を整えながら体育館の下駄箱に乱暴に靴を入れ、体育館の重い扉を押し開けた。

扉を開けた瞬間、感じるのは汗のにおいと熱気。そしてボールが跳ねる音とバスケシューズがキュッキュツと床をこする音が聞こえる。もちろん、気合の入った掛け声も。

「おせーよ！なにしてたんだよ」

靴をはくため下を見ていた愛奈の頭上にかけられた言葉。声の主から未来だと分かった。

「ごめんって、ちょっと考え事してたら時間忘れたの」

靴をはきながらそう呟いて愛奈は顔をあげた。

すると目に入っただのは珍しく前髪を結んだ未来の姿。Ｔシャツにハーフパンツ。ナンバーリングをつけた彼は額に汗をかいていた。

「考え事？」

未来は汗をＴシャツの袖で拭いながらそう言った。

「明日の事なら大丈夫だって、オレがいるんだから」

「アンタだから心配なのよ……」

「あ！？何が心配なんだよ！」

うー、と唸りながら未来は愛奈を睨みつける。それに対して愛奈は首をかしげ、微笑んでみせた。

そんなやり取りをしているとこちらに気がついたのか女子部長の羽賀なつきと男子部長の大知悠<sup>だいちゆう</sup>が駆け寄ってきた。

「遅かったね、愛奈」

「体調でも崩したのかと思ったよ」

「ごめんねえ……」

女子部長のなつきは華奢な体つきからは考えられないほどバスケットがうまい。なによりドリブルの速さとシュートの正確さはずば抜けているのだ。性格は男っぽい<sup>おにっぽい</sup>がそこがみんなに好かれている。

男子部長の悠は成績優秀で生徒副会長までやっている。冷静な判断と正確なパスが彼の特権だ。性格は穏やかで怒った姿を見たことはないに等しい。

二人とも、信頼できる人間だ。

平謝りの愛奈に悠が慌てて手を振った。

「遅刻とはいえ来てくれたんだから良いよ。それで、俺たちから相談なんだけど、いいかな？」

「うん、何？」

「実はさあ……」

愛奈が頷いてからなつきが間髪を入れずに作戦板を取り出した。相談とは明日の攻め方についてだった。マネージャーから見ての動きのアドバイスだ。悠も同じ相談らしい。

愛奈は一年生に明日の準備を頼み、二人と共に作戦板を取り囲んだ。

その間にいつの間にか未来は練習に戻っていた。

「……よし、ありがとう！これなら大丈夫かも」

「うん、この作戦なら湊が一番あってるもんね。ありがとう、愛奈」

「ううん、あたしにはこれくらいしか出来ないけど……明日に向けてがんばろー！」

愛奈はオーっと言って腕を高く振り上げた。なつきもそれをまねて笑顔になる。二人はもう一度「ありがとう」と言う練習に戻って行った。

その二人の背中に小さく「頑張れ」と呟きながら愛奈は明日の準備に急いだ。もちろん練習している部員たちのドリンクやタオルの準備もだ。

一年生の女子はきちんと手伝ってくれるが男子をもなるとなかなか言うことを聞いてくれない。けれど、私語をしているわけではない。ちゃんと未来たちの練習を見ているのだ。

愛奈はふ、とため息を落としコートに背を向けタオルを氷水から取りだして絞る。氷水から上げた細い手はかじかみ、赤くなってい

るがこれくらい、練習している部員達に比べれば辛くなんて、ない。その時だった。

「あっ!？」

「先輩!!」

一年生の男子がざわざわと騒ぎ始め、コートの中に入って行く。愛奈はどうしたものかと振り返えろうとした。だが、聞こえた誰かの声に思考が止まった。

未来!

未来?未来がどうしたの?

愛奈は嫌な汗を背中に感じた。寒いのに汗が噴き出る。恐る恐る振り返ってみると、目に映ったのは

みんなに囲まれているダレカ。倒れている『ダレカ』。

そのダレカを理解するまで何秒かかっただろうか?  
ダレカを理解する前に視界がうるんで景色がにじみ出す。  
愛奈の思考が始まった瞬間、反射的に叫んでいた。

「未来!!」

過去に味わった恐ろしいほどの虚脱感……あの時の嫌な感じがする。

愛奈は記憶を巡っていた。

記憶 【AINA】（後書き）

久しぶりの投稿です……  
すみませんでした。

## 痛み【MIRAI】

頭が痛い。とても。

目覚めたとき、未来は見覚えのない部屋にいた。いや、『空間』  
と言った方が正しいのかもしれない。

『ここは……つつう！！』

未来は頭の割れるような痛さに顔をしかめた。なんだ、この頭の  
痛さは。打った記憶も、何かが当たった記憶もない。

それに、ここはどこだ？ 急に飛ばされたようなものだ。もちろ  
ん、頭の事と同じ、記憶にはない。

『それに、声が……？ こもってるのか？』

何がそうさせているのかは分からない。耳がおかしくなったのか、  
この空間がそうさせているのか？

どこだかわからない空間でこんなことになるとは……まったく、  
厄介な事だ。イライラする。

『はっ……ついに頭イッたのかな……』

自分の言葉に自嘲の笑みをこぼしながら未来は額に手を当てた。

未来は頭上を見上げてみた。だが、周り同様、白い空間のみが存  
在する。どこまで続いているのだろうか……そんなことを思いなが  
ら手を伸ばしてみた



「未来！！ 未来ってば！！」

「ちょ、愛奈、落ち着いて！？ 頭打ってるやつの頭打ってどーすんの！？」

愛奈となつきの声がする。  
頭がジンジンと痛かった。

「……………てえ……………」

さらなる頭の痛さに未来は重いまぶたを開けた。今度は頭だけじやなく、体も痛く、しかも重くてだるい。吐き気すら覚える。

「未来、頭打って気絶したんだよ。他のところは大丈夫？ 痛いところない？」

愛奈が未来の顔を覗き込む。その目がうるんでいるのは気づかないふりをした。

そして、自分の体の異常を確認する。

「足が痛い」

素直にそう言った。右足首が異常なほど熱く、ジンジンする。よく見るとそこは明らかに腫れあがっていた。

それに気がついたらしい悠は目を見張らせてとっさに未来の足もとにしゃがみこんだ。

「な、何だよ？」

「痛かったら痛いって言ってる？」

悠は未来の質問には答えず、ただそう早口に言った。自分の発言を無視されたことに少しイラッときたが未来は黙って頷いた。

そして悠は未来の足首に触れ、腫れあがった部分を押す。

「つつ！？ な、何すんだよ！？」

「やっぱり」

「てめ、聞いてんのか！？」

未来の言葉は完全に無視だ。悠はそつと未来の足首から手を離れた。

そして、言った。

「明日の大会は」

その先の答えは聞きたくない事実。分かっていた事だけに心臓がえぐられたような痛みだった。

そしてその次に浮かんだ感情に俺は

## 痛み 【MIRAI】（後書き）

やっと更新できました。しかしながらまた更新があきます。

## 後悔 【AINA】

「明日の大会は、無理だ」

凜とした声が体育館に響く。

次にその場を包んだのは沈黙だった。シンとした空気が流れる。

思考が始まったとき、愛奈の心を掻きまわっていったものは 後悔だった。

「……何言ってるんだよ」

沈黙を破るように彼が 未来が口を開く。その声は、震えていた。

腕に力を入れ、足をかばうようにして、顔をゆがめて  
未来は悠の腕をつかんだ。その様子は、何かにすがっているように見えて、息が苦しくなった。

「大丈夫だよ、こんくらい。出れるって」

「ダメだ。こんな怪我しているお前を出すわけにはいかない。骨折まではいつてないけど、たぶん、ひびは入ってる。走ることは愚か、歩くことだつてきついはずだよ?」

悠の諭すような声で、未来は押し黙った。  
確かに、この腫れは普通じゃない。

それに、悠は医者の子だ。きっと、彼の言っていることは正しい。

また、沈黙が流れる。

みんなは、一体何を思っているのだろう。

未来を同情しているだろうか？　それとも

「ごめん」

不意に自分の唇からこぼれた言葉に、愛奈は驚き、悲しかった。みんなが一斉にこちらを見る。

その顔はみな、不思議そうに眉をひそめていた。

愛奈はそんなみんなから目をそらしながら拳を握る。

「あたしが、今日夜練入れなかったら……こんなことには」

「何言ってるんの愛奈……？」

「愛奈のせいじゃないでしょ？　ううん、誰のせいでもないよ」

「そつだよ」

女子の声がたくさん返ってくるが、それでも愛奈の心をほぐすまでには至らなかった。

円陣の中心に力なく座り込んでいる未来が、こちらを見ているのが分かる。

その表情が、一体何を語っているのか　愛奈にはわからなかった。

「オレは……」

未来が口を開きかけ、また閉じる。

それと同時に自分に向けられていた目も閉ざされ、愛奈は酷い孤独を味わわれた。

彼が何を言いたかったのか。

自分に対することだろうか。  
結局、何一つとして分らない。

「とにかく」

この場を空気を変えるように手を叩いたのはなつきだった。  
見れば彼女は真剣な面持ちをして未来を、そして自分を見つめて  
いる。

みんなの視線が自分からなつきへと向けられた。

「未来をこのまま放っておけないでしょ？ 病院に運んで、診てもらわなくちゃ 悠の言葉を疑ってるわけじゃないよ？ ただ、ちやんとした治療を受けないと、回復が遅くなっちゃう」

「……………」

す、と未来に向ける目がどこか気遣わしげだった。

何もかも、自分以外のすべての物を閉ざすように未来は目を閉じ、  
力なくうなだれた。

それを肯定ととったのか悠は未来に肩を貸し、立たせてやる。反  
対側には湊がついた。

立たされ、足を引きずりながら遠ざかっていく未来の背中を見る  
のが辛かった。

三人を見て、部員たちが散らばる。片づけを行う者、三人を追う  
者、車の手配をするためか、携帯電話を握りしめる者。

知らず、拳に力が入り、鼻の奥がツンとする。どうしよう、泣い  
てしまいそうだ。

（また、あたしのせいで傷つけてしまった）

途端脳裏をよぎったのは父の姿だった。

父は、今入院している。意識は無い。昏睡状態だ。

まだ幼かった愛奈はたくさんの方に興味があった。だから、あの日もその感情に任せて、自分よりも年上の小学校高学年くらいの男の子たちに近づいたのだ。

彼らは幼い愛奈を見て、にやにやと笑い、大きな道路を指差した。あそこを渡ったら、すぐく素敵なものをあげるよ、と言って。そこからは記憶が曖昧だった。それでも、その記憶だけはまざまざとよみがえる。

母から、姉から聞いた言葉によると、自分は車がたくさん通っている道路を渡ろうとしたらしい。信号なども使わず。

そして、轢かれそうになったのを庇った父が

結局、また自分の所為で傷つけてしまった。

どうして、自分に関わる人は傷ついて行くのだろう。

私は

不意にあたたくになった拳にハッとして顔を上げるとなつきが愛奈の顔を覗き込んでいた。

見れば、彼女は強く握って白くなった愛奈の拳を両手で包んでくれているのであった。

その表情は優しくもあり、気遣わしげでもある。

「愛奈のせいじゃないよ。部活中の事故なんだから。それに、バスケに怪我は付き物でしょう?」

「……うん」

頷いたが、心は晴れない。

それほど、愛奈の心の傷は深かった。

未来が負った傷は、体だけではない。心も傷を追っているに違いない

一体どんな顔をして未来に会えばいいというのだろうか。  
愛奈にはわからなかった。



## 後悔 【AINA】（後書き）

しばらく更新をしていませんでした><;

お気に入り登録してくださった方、申し訳ありませんでした。

これから不定期になるかどうか、私もよく分かりません。

けれど、なるべく愛奈、未来のこれからを追うべく更新ペースを上げて行こうと思いますので、どうぞこれからもよろしくお願いいたします！

## 嗚咽 【MIRAI】

なすすべなく病院へ送られ、今はベッドの上に居る。

悠の言った通り、骨折はしていないがひびが入ったらしい。走ることはもちろん歩くことも難しい。全治一カ月。最悪だった。

「……………」

一人悪態を吐く。その悪態を聞く者はだれもおらず、しんとした無機質な白の壁に吸い込まれていった。今日は入院らしい。だが、明日には退院できるので、ギブスを巻いて大会に行くつもりだ。でも。

（どうせ俺は出られねえ）

未来は右手でがりがりと頭を搔いた。眉間には深い皺がより、左の拳は震える。

月明かりに照らされたこの部屋に一人。　　そう、一人。

「いつもそうなんだ。俺は……………」

体を倒し、ベッドに寝転がる。右手は頭から滑らせるようにして目の上に置いた。

何も見たくない。

何も聞きたくない。

何も、何も

つう、と一筋の『光』が未来の目から流れおちた。それはとどまることを知らず、次々とあふれだしてくる。

結局俺は何もできないまま、変わらないままなんだ。

鼻の奥がツンとする。呼吸が乱れ、嗚咽がみっともなく自分の喉から出てくる。

泣くなよ。とまれよ。俺は泣きたくなんてねえんだ。

そんな思いとは裏腹に、涙は止まることを知らないかのようにあふれ出た。

なんで泣いているんだろう。なんで俺は

不意に廊下からどさ、と何かが落ちるような音がした。

その音に驚き、思わず息を呑む。

未来は腕で涙をぬぐうと体を起こした。

「……誰かいるのか？」

深夜という時間帯ではないが、消灯時間はとっくに過ぎているはずだ。

看護師か？

目を凝らして病室のドアにつけられた曇りガラスの向こうに居る人物を見つめる。

「誰だよ」

「……っ」

「愛奈？」

小さく漏れた声に幼馴染の少女の名を呼ぶ。

だがその声の主は病室に入ろうとはしなかった。ましてや開けようともしない。ドアに寄りかかったのであろう、ガタンと小さな音が鳴った。

「……ごめんね未来。あたし、いっつも空回り。みんなの為、って

「いつも余計なことして、傷つけて」

「……………」

「あたしが悪いの。だから、ごめん」

震える声で告げられた懺悔の言葉。

胸が締め付けられるように 切りつけられるように痛む。

バスケに怪我は付き物だろ？ お前のせいじゃない

（なんで言えねえんだ）

未来の喉は言葉を吐くことを一瞬にして忘れてしまったかのように  
だった。声が出ない。出せない。喉の中心で突っかかって出てこ  
ないのだ。

未来は愛奈の言葉を胸の中で反芻しながら愛奈の過去を思い出  
していた。

愛奈の父親が、愛奈を庇ったために昏睡状態なのは知っている。  
そのせいもあるのだろう、愛奈は自分に関わる誰かが傷つくと自  
分のせいだと思い込んでしまうのだ。

早く言葉を出さねば。

焦る心を落ち着かせ、言葉を紡ごうとする。

だが、今度は何を言えればいいのか分からなくなった。

バスケに怪我は付き物だ。だからお前のせいじゃない。たと言  
ったとしても彼女は余計に自分の責めるのではないか？

そう考えるとどうしても言葉を紡ぐことが出来なかった。

「……………」  
「……………」

す、と扉から気配が遠ざかる。月明かりに浮きあがっていた人影

が消えた。

「愛」

名前を呼ぼうと少し体を動かした瞬間、足に鈍く、激しい激痛が伝わり、未来は悲鳴を呑みこむことがやっとなった。

くそ、なんなんだ。

自分の体が言う通りにならないことがこんなにもどかしいものだったのか。

未来は唇を噛み、うつむいた。

一人うなだれる少年を照らす月明かりは何処か悲しげだった。

## 存在 【AINA】

ごめんなさい……

愛奈はただ心の中でそう何度も何度も繰り返していた。

ごめんなさい……！

息が苦しい。いつの間にか走り出していた。だが、どこに走っているのかは知らない。あたしは、どこに向かっているのだろう……

『愛奈？』

つぶやいた幼馴染の声音が耳から離れない。

どうしていつもこうなのだろう。自分にとって大切な人はいつも傷つき、離れてしまう。そんなこと、望んでいない……

息が苦しくなり、足をとめた。気がつけばそこは幼いころによく未来と来た公園

「……………」

何度も酸素を肺に送り込みながらその公園を見渡す。

もちろん、暗くて全体を見渡すことはできない。できないけれど、記憶は鮮明に思い出された。まだ幼く、何も知らなかったあの頃  
あたしは、なんて罪深いのだろう。いつたい、何人傷つけられ  
いのだろう。

わからなかった。

わからないから……この負の連鎖が続いてしまうのだろう。  
ふと見上げた夜空には星一つ見えなかった。

大会当日。未来が抜けた分には一年生が入ることになった。中学の時からバスケット部で、部長を務めていたらしい。もちろん技術は申し分ないが、未来には届かなかった。

「未来、大丈夫かな」

「……大丈夫だよ。未来だもん」

ふと投げかけられた言葉に胸がえぐられる思いだったが、平静を装った。

一人が乱れれば、チームも乱れる。たとえそれがマネージャーだったとしても。いや、マネージャーだからこそ、だ。マネージャーは選手を常に見守り、励まさなければならぬ。一年前からずっとやってきたことなのに、今更それが身にしみる思いだった。

その時、唐突に審判の笛が鳴った。試合開始の合図だ。

「これより、丘の上高等学校対桜田南高等学校さくらだみなみの試合を始めます。

礼！」

「お願いしまーす！」

我が桜田南のセンターがジャンプボールへと入る。丘の上のセンターは中学のころから有名な二年生だ。背なら負けていないが、ジャンプでどうしても負けてしまう

ボールが宙へと投げられる。それと同時にセンター二人が跳んだ。ボールの先導権を握ったのは。

「蓮！！行くぞ！！」

「おう！！」

桜田南だった。

思わず気持ちが沸き立つ。

応援席の女子たちが悲鳴にも似た歓声を上げた。

「行けーっ！！ そのままシュートー！！」

誰かがそう叫んでいる。

愛奈は片時もボールから目を離さず追っていた。

昨日の練習でやったパス回し。フォーメーション。うまく通っていた。

だが、昨日、この練習中に

「ナイツシューー！！」

ひととき大きくなった歓声にハッとした。

ふと顔をあげれば桜田南がシュートを決めていた。スコアを握りしめ、愛奈は今の試合だけに集中する。

（今は試合にだけ集中しなきゃ。勝たなきゃ、未来は試合に出れない……）

入院は余儀なくされたが、もう二度とバスケができなくなるわけではない。しかも勝ち進めば県大会がある。県大会までには期間があるし、勝てれば未来は試合に出ることができるのだ。だから。

（お願い）

ペンを握る指は細かく震えている。心臓は大げさな音で鳴っている。



（勝って　！）

ただ祈ることしかできなくても。声を掛けてあげることしかできなくても。

これがあたしのできることすべてだから。

目の前には激しい攻防を繰り広げる選手たちがいる。隣には声の続く限り叫び続ける仲間がいる。

未来。みんな、がんばってるよ

今は病院で一人仲間の勝利を祈っているであろう未来かれにそうつぶやいた。

ハーフタイムにはいり、選手たちが戻ってきた。みな、汗でユニフォームが体に張り付いて気持ち悪そうにしていた。

一年生がタオルを配り、愛奈たちマネージャーは飲み物を用意する。その間に顧問が選手に指示を出す。

いつもの光景だが、ここで疲れ切った選手たちをいやすのが未来の役割だった。

明るく、周りをひきつける力がある未来はよんだ空気の中でもみんなを引っ張ることができた。それにみんな救われていたのだ。

だが、今彼はいいない。それは、みんなにいったいどう影響しているのかは一目瞭然だった。

（みんな、何も言わない）

言葉を発するのも億劫なのか、それとも言葉にできないのか。

点数は五点差で桜田南が勝っている。だが、まだハーフタイム。油断はできない。

「……よし。みんな行つて来い！！　これに勝てば二回戦だ。未来のためにも頑張つてこい！！」

顧問がキャプテン、悠の背中を強めに叩くと選手の目に少し光が戻つたような気がした。

「　おつしゃあ行こうぜ！！」

「未来にも試合に出てもらわねーとな！！」

「桜田　ファイ！！」

「オオ！！」

円陣を組んで声をあげた選手たちを見て愛奈は言葉を失った。

みんな、未来のために頑張ろうとしている。

彼はそんなにもみんなに好かれていたのか。

複雑　だった。なぜかは分からないが、モヤモヤした。

（あたし　変）

「ピ　　！！」

体育館に高らかに音が鳴り響いた。

愛奈は心にかかった霧を気にしながらもコートに視線を送った。

もうすぐ、試合に決着がつこうとしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2852k/>

---

雪はやまない

2011年10月6日16時40分発行